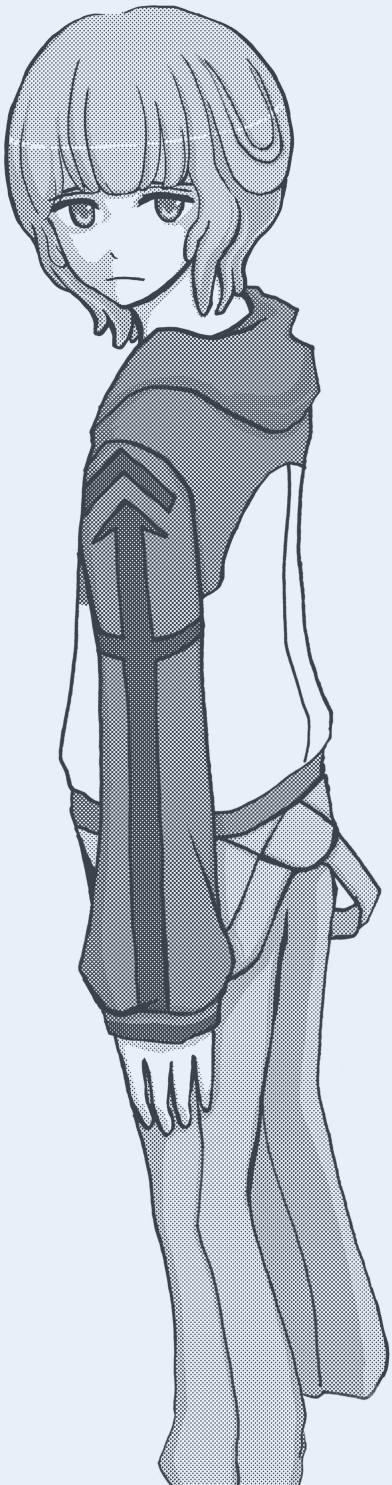

裁きの紋章

裁きの紋章

マレク・ウェルナーは暗闇の中にいた。

肉体の傷はとうに癒えてはいたが、彼の意識は目覚めを拒んでいた。目覚めれば否が応でも認識することになるからだ。自分が奪った命の事を。自分が犯した罪の事を。

そこから逃れたいが故に、マレクは眠り続けた。全てを拒み、自らの意識を暗闇の中に閉じ込め続けていた。故にここでは何も聞こえず何も見えない、筈だった。

だがそれでも彼は逃れることはできなかった。夢の中でもなお、それは彼の前に繰り返し現れた。彼が殺した者達の、無惨に捻り潰された死体が、断末魔の悲鳴が、血に汚れた己の手が。

いっそあの時、死んでしまえていたならどんなに良かったかとマレクは思った。あの時、逃げ込んだ先の教会に現れたあの男に殺されていたのなら、今もなお悪夢に苛まされることはなかったのにと。

『マレク』

何も聞こえるはずの無い暗闇の中で、マレクは自分の名を呼ぶ声を聞いた。その声は彼の心に直接聞こえてきた。

「誰？　僕の名前を呼ぶのは」

だがその声と気配には確かに覚えがあった。間違えるはずもない。昏睡状態に陥る前にマレクとジョセフの前に現れ、彼らを完膚無きまでに叩きのめした金髪の男だ。確かザーギンとか呼ばれていた。

「そうだ、確かあの時の……貴方は一体何なの？　僕に何の用があるの？」

『君を起こしに来た。目を覚ましたまえ。君には君のやるべきことがある』

「嫌だ……もう何も見たくないし、何も聞きたくない」

マレクは耳を塞ぎ、目を閉じようとした。だが目を閉じても目の前に広がる闇はそのままで、耳を塞いでも声は変わらぬ大きさと明瞭さで聞こえてくる。

『このまま眠っていては、君はこれから連れて行かれる場所で、格好の実験体として扱われることになる。人として扱われる事などまず望めない』

「僕はそれだけの事をしたんだ。もう何をされたって文句を言う資格なんてないよ」

うずくまったままマレクは応えた。すると、闇の中からため息まじりの声が聞こえてきた。

『やれやれ……それで罰を受けているつもりか。仮初めの死に身をやつして、何も見えず、何も聞こえない

振りをして、君はそれで自分を裁いたつもりでいるのかな？』

心底呆れたような口調だった。姿は見えずとも、肩をすくめている様が思い浮かぶようだ。その物言いにマレクはむっとしたような口調で問う。

「……何が言いたいんだよ」

『その絶望を、その怒りを、何故然るべき相手にぶつけない。君も、ジョセフも、何故与えられた力を正しく使おうとしないのか』

ジョセフの名前を聞いた時、マレクがはっとしたような表情を浮かべた。ようやく探し求めていた答えを見つけたような、そんな表情が。それに気付いてか気付かずにいてか、ザーギンは語り続ける。

『君の力は、世界をあるべき姿に変える為に、神より授かった力だ。贖罪を望むのであれば、その力を正しく使うべきではないのかな？』

沈黙がその場を支配した。だがザーギンの気配が消えたわけではない。マレクの反応を待っているようだ。

やがてマレクの方が沈黙を破り、呟いた。自分に語りかけるように。

「分かったよ……僕が何をするべきなのか」

『そうか。君なら答えを見つけると思っていたよ』

闇の中からザーギンの声が響く。

『君がいる場所から北東に２００キロほど行った所に、四方を山に囲まれた小さな村がある。その村の南側の外れの森の中に火事で焼け落ちた小さな教会がある。ジョセフはそこに行くはずだ。あとは分かるかな？』

「ああ」

『では、目覚めるがいい。為すべき事を成し遂げる為に』

夕暮れのアウトバーンを、一台のバンと二台のバイクが疾走していた。どこまでも真っすぐに伸びる高速道路には、他に走る車は見えない。

救急車のような外観のその車は、車内スペースの半分をガラスの覆いのついた寝台が占めている。窓から差し込むオレンジ色の夕陽で照らされた車内には、寝台両脇に白衣の男が二人、車内後部には青い軍服を着た男が一人。前を走りエスコートする二台のバイクも、似たデザインの軍服を着た兵士が運転している。

マレクはその寝台に横たわっていた。酸素マスクを

装着させられたまま、昏々と眠り続けている。

ガシャァァン！

ガラスの割れる音が車内に響いた。驚きに目を見張る職員たちの前で、それはゆっくりと半身を起こした。ブラスレイターに変身したマレクが。

「動くな！」

白衣の男二人が床に転がるようにして伏せるのと、軍服の男がサブマシンガンを構えるのはほぼ同時だった。融合体を前にした人間の対応としては極めて冷静で迅速な対処だったと言える。

だがそれもマレクの瞬発力の前では緩慢な動きにしか映らなかった。軍服がマレクに狙いを定めるより素早く寝台から飛び降りて相手の前に飛び降り、サブマシンガンを払いのける。払いのけたサブマシンガンが窓を突き破り車外に放り出される瞬間、運転席側にある扉が勢いよく開く音が聞こえた。

「クソっ！」

助手席にいたもう一人の白衣の男が、腰のホルダーから自動拳銃を引き抜きながらマレクの方に向かってきた。マレクはサブマシンガンを払いのけたその手をくるりと返して目の前にいる軍服の襟首を鷲掴みにし、振り向き様に背負い投げの要領で運転席めがけて投げつける。

「うわぁぁぁ！」

運転席側の白衣の男は反応する暇もあらばこそ、勢いよく飛んでくる同僚と一緒に運転席に激突することになった。当然ながら運転手も無事では済まされず、大の男二人にぶつかられた衝撃であらぬ方向にハンドルを切ってしまった。

コントロールを誤った移送車はそのまま道路脇のフェンスに接触し、そのまま激しく横滑りした後、横転した。

先導していたバイク二台がUターンして移送車の手前で止まる。二人の兵士がバイクから降り、その陰に貼り付いて盾としながらサブマシンガンを構えた瞬間、今は天井となった窓を突き破って何者かが車外に勢いよく飛び出した。

飛び出したのはマレクだった。バイクに乗った二人の兵士は、沈み行く夕陽を背景に、天に向かって飛び出す融合体の姿を視認した。

マレクはそのままバスの脇の地面に着地する。着地すると同時に、二人はサブマシンガンの一斉掃射を浴びせかけた。だがそれはブラスレイターと化したマレクの前では石礫ほどの威力も持たない。

「邪魔なんだよ……どけよ！」
マレクの掌から光の鞭が伸び、目にも留まらぬ速さで二人の持つサブマシンガンを叩き落とす。
二人の目の前からマレクの姿が消えた。次の瞬間、そのことを認識する間もなく、一人が強い力で突き飛ばされた。
「消えた！？」
仲間が突き飛ばされるのを見た兵士も、それを確認した瞬間に強い衝撃を受けて吹き飛ばされ、宙を舞うところだった。そのまま地面に叩き付けられ、数メートルほど転がってようやく止まる。
「……っ、くそっ」
「おい、あれを見ろ！」
体勢を立て直した二人が見たものは、先ほどまで自分たちが乗っていたバイクの一台に跨がるマレクの姿だった。
マレクが光の鞭をもう一台のバイクめがけて叩き付ける。鞭はバイクを真ん中から真っ二つに両断し、ただの鉄の塊と化した。そしてそのままバイクをスタートさせる。
「逃がすか！」
二人が再び一斉掃射を浴びせかけるも、マレクの乗ったバイクは彼らの間をすり抜け、一瞬にして走り去ってしまった。後に残されたのは鉄屑と化したバイク1台と横転した移送車一台、そして呆然とする人間達だけである。
「逃がした……くそっ、なんてザマだ！」
「今は怪我人の救助が先だ、車内に残されている人間を助け出すぞ！　それから直ちに本部に救援要請と報告を！」

ジョセフはガルムを駆り、山の中の道路を疾走していた。
デモニアックの大群により、ＸＡＴ本部もろとも壊滅させられたあの町から脱出してからどのぐらい走ったろうか。随分長く走った気はするが、夜が明けるまでまだまだ時間がありそうだ。
「どうやら、追っ手は撒いたみたいね」
声とともに、計器類のパネルにエレアの姿が浮かび上がった。
「レーダーで追跡されてたみたいだから、相手の機体に衛星経由でハッキングして、こちらの位置を捕捉出来ないように細工しておいたわ。今頃は見当違いの方

向に向かっているはずよ。それより、これからどうするつもり？」

ジョセフはそれには答えず、空を見上げた。曇った空から雪が舞い落ちてきていた。風も強くなってきている。この分では吹雪になりそうだ。

山を越えると小さな町があり、その町の外れにジョセフの育った教会がある。ジョセフはそこを目指して走っていた。人が近づくような場所ではないし、取り壊されていなければ、身を潜める場所としては丁度いいだろう。

何より、少しの間だけ一人になりたかった。誰にも邪魔されない場所で、少しの間だけ一人で考えたかった。これからのこと、ザーギンのことを。

ガルムは山の麓にさしかかってきていた。雪が本格的に降り始める前に、山道を抜けてしまった方がいいだろう。

町の外れに位置するジョセフの育った教会は、最後に見たときと変わらない姿でそこに佇んでいた。異民を疎んじる市民によって焼き討ちにされた時の姿のままで。

建物の形はほぼそのままで残っているが、窓という窓はすべて割れてなくなっており、窓枠の周囲の外壁は煤けて黒ずんでいる。その様はさながら建物の死骸といった形容が相応しかった。

ジョセフはガルムを教会の裏手に隠し、焼け落ちた扉の残骸を踏み越えて中に入っていった。礼拝堂の中は更に損傷が酷く、木造の内壁や座席はほぼ全て焼け落ちてしまっている上、焼け焦げた床は窓からの風雨に晒されて荒れ放題に荒れている。

こうして自分の育った場所が無惨に変わり果てた姿を改めて目の当たりにしたジョセフは、自分の帰る場所はもうどこにも無いということを今一度実感した。ミュラー神父も、孤児たちも、サーシャも、そしてザーギンももう居ない。皆、彼の手の届かない所に行ってしまった。

だからこそジョセフはザーギンを滅ぼすのではなく、止めたいと望んでいた。かつて同じ理想を抱き、同じ道を歩んだからこそ、戻ってきてほしいと願っていた。

（だが、俺にできるのか？　ザーギンを止める事が）

少なくとも、今のジョセフの力ではザーギンには遠く及ばない。それは分かりきっていた。だが何より絶

望的なのは、ザーギンが彼の言葉も届かないような所まで行ってしまっている事だった。死をまき散らす蒼白の騎手となり、全世界に破壊と滅びをもたらす存在となった彼を、果たしてどのような方法で止めれば良いのかジョセフには未だに見当もつかない。

そうしてどのぐらい思い悩んでいただろうか。扉の方から焼けた床を踏みしめる足音が聞こえてきた。その音に我に返る。物思いに耽っていたとはいえ、気配すら察知できなかったのは迂闊すぎた。

慌てて振り返り身構え、侵入者の姿を確認する。その途端、ジョセフの目が驚愕に見開かれた。

「マレク！？」

侵入者の正体はマレクだった。ジョセフの姿を認め、嬉しそうな笑みを浮かべている。

彼はザーギンに挑んで瀕死の重傷を負い、ジョセフと共にＸＡＴに収容された筈だ。そのマレクが何故ここにいるのだろうか。

「ジョセフ！　僕、分かったんだ、自分のやるべき事が」

「何を……」

「あのザーギンって人が何もかも教えてくれたんだ。人間は世界を間違った姿に変えてしまった。だから、この世界は一度滅びなきゃならないって」

一息に告げると、マレクは語り続ける。今まで溜めに溜めた胸の内を吐き出すように。

「僕たちの力はその為に作られたものなんだって。今なら分かるよ、ジョセフ。僕が、いや、僕たちが滅ぼさなきゃならない相手は、もっと他にいるってことを」

「違う！　マレク、それは過ちだ」

「どうして？」

心底分からないと言った顔でマレクは小首を傾げる。そんな事を言われるなど思いもよらなかったという表情だ。

「前にも言ったはずだ。奪っていい命などないと。人には人を裁けない事を、お前は分かっているはずだ」

「人が人を裁いちゃいけないのなら、誰が人を裁いてくれるの？」

動揺するジョセフとは裏腹に、マレクは抑揚の無い口調で問いかけた。

「神様だって裁いてくれなかったのに。どれだけ追い詰められても、神様は救ってなんかくれやしなかった。だから、神様がいないなら、誰かがやらなきゃいけないんだ」

マレクがゆっくりと歩み寄ってきた。その眼差しは底知れぬ虚ろな闇を湛えている。ジョセフですら戦慄を禁じ得ないほどの深い闇を。

「僕たちの力が、救われるべき者を救い、裁かれるべき者を裁くために作られた以上、僕たちにはこの力を使う義務があるはずだ。違う？」

ジョセフから数歩のところで立ち止まり、底冷えのするような眼差しで真正面から見据えてきた。この眼には見覚えがあった。ザーギンと同じだ。絶望だけが残された眼は、あの日を堺に豹変したザーギンの眼差しとそっくりだった。

「この力を作りだしたのは人だ。人の業で作り出された力である以上、その力で為される裁きは、どんなに言葉を繕っても裁きなんかじゃない。ただの破壊だ」

内心の動揺を押さえ込み、ジョセフは辛うじて反駁した。怖かった。マレクまでもがザーギンと同じ所に行ってしまったのように思えて。それだけは何としても止めたかった。

「マレク、良く考えろ。お前は過ちの何たるかを知っている筈だ。奴に何を吹き込まれたのか知らないが、お前がザーギンの配下に下るというのなら、俺は何としてでもお前を止めなくちゃならない」

その言葉を耳にしたマレクの口元に笑みが浮かんだ。見るものをぞっとさせる、嘲笑うかのような禍々しい笑みを。

「よく分かったよ、ジョセフ。それなら僕は、あんたをこの手で排除しなくちゃならない」

「何！？」

「ブラスレイターは進化の過程で淘汰に勝ち残り、更なる高みに昇った融合体。そして選ばれた者同士は更に淘汰し合い、生き残った方はより強い者として更なる進化を遂げる存在だ」

マレクが右手を虚空に伸ばしてきた。何かを掴もうとするかのように開かれた掌には、ソロモン七十二柱の六十二番目の悪魔を示す紋章が光を帯びて浮かび上がっている。

「僕にはねぇ、必要なんだよ。あんたを倒す事で得られる力が。今の僕の力じゃあの人の目的の為にはまだまだ足りないんだ」

同じ色の光がマレクの全身を包み込む。その光が消えた時、彼の姿はブラスレイターへと変じていた。

「それに邪魔をする以上、あんたはあの人にとっても僕にとっても敵だ。全力で排除させてもらう！」

言い終わるや否や、マレクが槍を振りかざして猛然

と突っ込んできた。並の人間であれば反応することはおろか、何が起こったかも理解出来ないうちに彼の槍に串刺しにされていただろう。

だがジョセフは横っ飛びに跳ねて攻撃を躱し、着地の瞬間ブラスレイターに変身した。着地の瞬間に右手の紋章より青い光が迸り、一振りの湾曲刀がその手に顕現する。

マレクの方も着地と共に方向転換し、突進してきた。だがジョセフはその場から動こうとはしない。その代わりに右手に顕現させた光の鞭でマレクの獲物を搦め取り、相手の勢いを利用して釣り上げる要領で投げ飛ばした。投げ飛ばされたマレクはジョセフの頭上の天井ぎりぎりを掠めて弧を描くような軌跡を描き、焼け焦げた信徒席の残骸の上に墜落した。

「馬鹿な真似は止めろ、マレク！　こんなことをしても……」

「うるさい！」

ジョセフが最後まで言い終わらないうちに、マレクは壊れた座席の中から身を起こし、跳躍した。

その次の瞬間、ジョセフの眼に映ったのは猛然と襲い来る槍の穂先だった。瞬発力に物を言わせたスピードで、マレクは瞬時にジョセフの眼前まで移動していたのだ。

それを認識するよりも先に、ジョセフも右手の鞭を剣に変じて振るっていた。相手の獲物を外側に押し出すようにして軌道を逸らし、エネルギーをあらぬ方向に受け流す。

「ジョセフこそ、どうして本気で打ってこない！　僕を止めるんじゃなかったのか？」

最初の攻撃を逸らされながらも、マレクは槍身による打撃を次々と打ち込んできた。その度に二人の獲物がぶつかりあい、剣戟の音が連続して堂内に響き渡る。

ジョセフはマレクの槍撃を刀身で受け止めて防ぐのではなく、軌道を逸らす事で回避していた。重さの上では槍の方に分があり、まともに受け止めたのでは剣の方が負けてしまいかねない。そこで相手の力の流れには逆らわず、進行方向だけを逸らして外側に押し出せば、マレクの槍は狙いを大きく逸らし、結果として全く見当違いの方向に振り抜かれることになる。

（この状況、俺は一体、どうすればいい……？）

マレクの攻撃を捌き続けながら、ジョセフは葛藤していた。マレクの槍撃の躊躇の無さからして、彼がジョセフを敵とみなし、本気で倒そうとしていること

は最早疑いようはない。その上相手が対話にも応じないとなれば、残された道はただ一つ。

（俺にこの手で、マレクを屠れというのか？）

そんなことは出来よう筈もなかった。ましてや彼は一度は己の過ちに気付き、深く悔いていた筈だ。そんな彼がザーギンに組するようになったというのは未だに信じ難いことだが、ジョセフは何としてでも殺さずに止めたかった。マレクも、今ここにはいないザーギンも。

（だがこのままでは、埒があかない）

勢いで押しているとはいえ、マレクの攻撃パターンは単純で稚拙なものでしかなく、同じような技を繰り返し出してているにすぎなかった。パターン化された攻撃は見切るのも容易い。

何度目かの槍の猛攻が空振りに終わった瞬間、ジョセフは攻撃の直後でがら空きになったマレクの腹に正面から蹴りを入れた。マレクは受け身を取る事もならず、そのまま後方に吹き飛ばされ、壁にぶつかって漸く止まる。

「う……」

マレクは呻きながらも壁から身を剥がすと、右手の槍を一振りして光の鞭に変えた。彼の意のままに動く光の鞭が、鎌首をもたげた蛇のごとく宙をうねる。

「調子に……乗るなぁぁーッ！」

マレクの掌から放たれた鞭が虚空に身を踊らせ、ジョセフに襲いかかった。ジョセフは剣を振るい、襲い来る鞭を両断しようとするが、その刃が届く前に光の鞭は突如として軌道を変え、あらぬ方向に飛来する。

軌道を変えた鞭は天井に向かい、燃え残っていた梁を直撃した。焼けて脆くなった木材がジョセフの頭上に落下する。

慌てて横に飛んで躱すと、今度は正面から説教壇がうなりを上げて飛んできた。避けきれないと判断し、剣を横薙ぎに薙ぎ払い両断する。

だが次の瞬間、ジョセフの視界に映ったのは、両断された説教壇の向こうから飛び込んでくるマレクの姿だった。

（しまった、囮か！）

回避するには既に時遅く、攻撃の直後では防御態勢を取るのも間に合わない。獲物を再び槍に持ち替え、大きく振りかぶるマレクの姿がジョセフの眼前に迫る。

衝撃と共にジョセフの身体が宙に浮いた。次いでし

たたかに床に叩き付けられた後、転がって壁にぶつかり漸く止まる。マレクの槍に脇腹を横殴りに殴打されたと気付いたのは、止まった後だった。

「ぐ……ぅ……っ」

痛みで呼吸が一瞬止まり、目の前も白く霞みかける。痛む身体を叱咤して床から引きはがそうとした時、腹の上に衝撃が走った。

「がっ！」

腹の上にマレクが馬乗りになっていた。雄叫びを上げながら、マレクが槍を高々と振りかざすのをジョセフは見た。

（ここまでか……）

この状況での回避はもはや不可能と思われた。さしものジョセフも観念しそうになる。

だが止めの一撃はいつまでたっても加えられることはなかった。見ると、マレクの腕は振り上げたところで止まっていた。ジョセフに向けられた槍の穂先が小刻みに震えている。この機を逃す手はない。

ジョセフは右手の剣を握り直すと、その柄をマレクの脇腹めがけて思いきり叩き付けた。

「がはっ！」

マレクの身体が衝撃に傾ぎ、押さえつける足の力が緩む。その隙にすかさずマレクの身体を突き飛ばして押しのけ、脱出する事に成功した。すぐさま脇に転がって距離を取り、その勢いで身を起こして剣を構え直す。

「く……そぉ」

マレクの方もよろよろと立ち上がる。今の一撃が効いているらしく、足元も覚束ない。

だがそれはジョセフの方も同じだった。先ほど殴打された脇腹のダメージは予想以上に大きいらしく、呼吸する度に鈍い痛みが走る。人の身体のままであれば、肋骨の数本は砕けていたはずだ。これ以上は長引かせるのは避けたいところだった。

「あアアああアぁァっ！」

先に動いたのはマレクだった。床を蹴って跳躍し、天井近くまで到達する。落下しながらジョセフに向かって槍撃の連打が放たれる。

（凌ぎ切れ……！）

迎え撃つジョセフは剣を構え、全ての攻撃を叩き落とさんと刀身を攻撃の軌道上めがけて振るう。音速を超える世界の中、ジョセフには自分の剣の動きもマレクの槍の動きも緩慢な動きの映像として認識された。

だがその数万分の一秒にも満たない刹那の瞬間、

ジョセフは信じ難い光景を目の当たりにし、愕然とする。
　マレクの槍撃は一つとしてジョセフをまともに狙ってはいなかった。いずれの軌道もジョセフが叩き落とすよりも前に外側に逸れていく。落下してくるマレクの身体、その先にあるのはジョセフの構えた湾曲刀。
（まさか……！？）
　光を超えた速度でその事実に気付いたジョセフは繰り出しかけた剣を引こうとする。だが肉体の動きは彼の認識より遥かに遅く、気付いたときにはジョセフの剣がマレクの身体を貫くまであと僅かな距離もない。
（間に合え……！）
　剣の切っ先がマレクの腹に触れるか触れないかの瞬間、ジョセフは剣を持った手を強引に外側に向かって振るう。そのまま己が獲物を手放し、そして……

「どう……して」
　全てが終わった時、そこには折り重なるようにして倒れるジョセフとマレクが居た。双方とも変身は解けている。
　ジョセフの手放した剣はマレクの槍を道連れにして飛んでいき、そのまま壁に突き刺さった。そのためマレクは身一つでジョセフに激突する形となり、二人揃って床に転がる羽目になった。
「どうして僕をその剣で斬らなかったの。ジョセフなら、止めをさしてくれると思ったのに……」
　ジョセフの上に乗ったまま、マレクが絞り出すような声で呟いた。その肩は僅かに震えている。
「マレク、やはりお前は……」
　マレクは最初から自分が死ぬつもりでジョセフに戦いを挑んでいた。だとしたら、これまでの捨て身とも言えるような猛攻も辻褄が合う。相手がマレクでも、殺す気で挑めばジョセフとて本気で戦いに挑まざるを得ない。そして双方が決死の覚悟でぶつかりあったのなら、どちらか一方は確実に死ぬ、はずだった。
「そうだよ。ザーギンの手下になったのは嘘。僕があいつの側に行って、ジョセフの敵になった事にすれば、ジョセフは僕を殺してくれると思ったんだ」
　そう言って、マレクは口許に笑みを浮かべた。自らを嘲り嗤うかのような酷薄な笑みを。
「あの時、ザーギンに叩きのめされた時に死ねてたら、こんなややこしい事しなくて良かったんだけどね。だからせめて、ジョセフの手で引導渡してもらお

うと……」
　パン！
　マレクが全てを言い終わらぬうちに、辺りに乾いた音が響く。ジョセフが上体を起こしてマレクの頬を張ったのだ。
「何故だ」
　驚愕に目を見開くマレクに対し、ジョセフは感情を抑えた声で語りかける。
「どうしてお前達は、命を路傍の土くれのように粗末に扱いたがる。自分の命であっても他人の命であっても、粗末にしていい命など、一つとして無いはずだというのに」
　その場を沈黙が支配した。マレクは張られた頬を押さえて俯いている。
「チャンプは……殺したくせに」
　しばしの沈黙の後、マレクがゆっくりと顔を上げ、ひび割れた声で呟いた。その目には涙が浮かんでいる。
「チャンプは殺したくせに、僕には生きろって言うの？　僕はもう取り返しのつかない事をしたんだよ！　自分が何をしたのかを思うと、居ても立ってもいられない。どうやって償えばいいのかも分からない。だからジョセフ、僕を殺して、僕を裁いて、僕を救ってよぉぉ！」
　大声で捲し立てると、ジョセフの胸にしがみついて堰を切ったように泣き出した。しばらくの間、教会の中にマレクの泣き声がこだまする。
「ジョセフしかいないと思ったのに……ジョセフにしか、僕の罪を浄化できないと思ったのに……」
「マレク、過ちを償うのは死ではないんだ。」
　激しく嗚咽しながら繰り返すマレクに、ジョセフは静かに語りかけた。マレクを自分の上から退けると、ジョセフは彼と向かい合うような形で座り込んだ。その肩に手を置いて静かに語りかける。
「ゲルトはもう、何を以てしても止められないところまで来ていた。あんな形でしか止められなかった事に関しては、俺に弁解の余地はない。だがゲルトを殺したのは、断罪する為ではないし、ましてや俺には誰かを裁く権利なんてないんだ」
　マレクは相変わらずジョセフにしがみついて嗚咽している。ジョセフはその震える肩を抱いた。
「俺には今のお前を殺す事は出来ない。お前が俺の刃にかかって死んだとしても、それは償いなどではなく、ただの逃げでしかないからだ。罪は生きてこそ償

えるし、生きていればこそ、悔い改める事も、祈る事も、救われることもできる。だからこそ、お前には生きてほしい。いつの日か、自分を救えるようになるために……」

夜が明ける頃には、雪は止んでいた。うっすらと地面に積もった残雪が、朝日を反射して輝いている。

雪の上に轍の跡をつけながら、ジョセフはガルムを押していた。後部座席の後ろからは、マレクも一緒になって黙々と車体を押している。

どうすればいいのかやっぱり分からないけど、その答えを見つけるまでは、もう逃げたりしない——それがマレクの出した結論だった。

ジョセフの視線を感じたマレクが顔を上げて僅かな笑みを口許に浮かべた。その表情には絶望に病んだ翳りは既にない。

あるいはその答えは一生かかっても見つからないのかもしれない。何が正解なのか分からないまま、見つからない答えを求めて彷徨い続ける事の不安はジョセフもよく知っている。

それでもマレクは生きて戦うことを選んだ。犯した罪の重さも、己の弱さも、何もかも知った上で生き続ける事を選んだ彼ならばこそ、あるいはいつか自らを救う答えに辿り着くことが出来るのかもしれない。

Ｆｉｎ

後　記

はじめまして。古道京紗です。

一度ぐらいはオフラインでの同人活動もやってみたいと思っていたのもあり、面白そうだから自分もやってみようという、今思えば非常に軽薄な動機ではじめての本作りに踏み切りました。

んで、紙媒体で出すからにはWebとは違う方がいいだろう、それなりにしっかりした話でないといかんだろうと考えた結果、「エロ無し全年齢向け」「シナリオ重視」「それなりに長く」という制約を自分に課したわけです。そしたら案の定迷走しまくりました。書く話が決まらない、決まっても書けない、これでいいのか自信が持てないetc……

要するに自分の実力顧みずに高望みした結果がこれだよ！　というわけですが、最後にはなんとか形になりました。意外と何とかなるもんです。

「ツヴェルフ編に入る前にマレクが起きて動いてたら」という前提のパラレルif本ですが、だいぶ無理のある展開になってしまった気がします。本編との整合性とか途中で投げ捨てました。もう「こんなルートもあったらいいな」ということで一つご容赦を。

本来の住処であるWebの方ではエロばっかり書いてます。マレクがジョセフに襲い受けしてたり、ザーギンがマレク陵辱したり、ザーギンがジョセフ襲ったり、そんなんばっかです。18歳以上の方で興味のある方は一度覗いてみてください。感想・突っ込みなどもお待ちしております。

最後になりましたが、忙しい中無理言って表紙イラストを描いてくれた妹1のcoro、これでいいかと諦めて途中で妥協して終わらせかけた原稿を読んでダメ出ししてくれた妹2の青星、そして本出すきっかけを作ってくれた皆様に多大なる感謝を。

2008年12月25日　古道京紗　拝

裁きの紋章

発行日	2009年1月11日
発行者	古道京紗
サークル	Pale Mag
	http://palemag.kazeki.net/
	schwarzewald@gmail.com
表紙イラスト	coro

Joseph / Marec
Blassreiter Fan Novel

古道京紗
http://palemag.kazeki.net/